

社会科教育における 視聴覚教材の有効性を学ぶ

～一人の師との出会いから～

元愛知県小中学校校長会会長

中村 巽

て、風呂水や洗濯水に利用していること。それでもなお水不足に苦しむ篠島、日間賀島の人々の声が、聴く者の心をゆさぶり、子どもたちは眉をひそめて聞き入っていた。

この知多半島の水不足解消のために奔走した先人の努力で、建設が決まった『愛知用水』。その実態を勉強しようとする子どもたちの意欲・関心は、学習の進展に従って、高揚されていくことが予測できるものであった。

斉藤喜博著『教師の実践とは何か』には、「実践するということは、自分の目の前にある、具体的な事実なり問題なりを対象にして、具体的に考え、行動し、事実を動かして、問題を解決していくことである」とある。

社会科教育においてこれを遂行しようとして、現地現場の調査・研究を大切にしようとするとき、それが困難な場合、それに代わるものとして視聴覚教材が機能してくれることを、この授業で教えられた。まさに『百聞は一見にしかず』の古語を体感した。

中学校での実践

その後、中学校に転勤して社会科担当教員となった私は、授業研究に努力した。その基本的態度は、「教科書の比較研究」によって客観的に「教材の精選」に努め、NHK学校放送テレビ番組の「録画利用」を中心に、視聴覚教材の活用を進め、問題解決学習の実践を継続することであった。この実践は、他の

よい授業を求めて

私が「よい授業」を求めて、先進校や附属学校で授業参観をさせていただいたのは、二十六歳のときだった。勤務する小学校が、市教育委員会から社会科教育研究の指定を受け、自分が社会科主任を命ぜられたからであった。

私は幸運にも『これだ！』と思う授業を参観することができた。それは、額田郡幸田町立荻谷小学校の研究発表会での、松井先生の授業であった。

その授業は、四年生の単元『愛知用水』の導入の授業で、教室の前面右側に、五万分の一の地形図を貼り合わせて作った「知多半島」の地図が掲げられていた。その地図には青色で塗りつぶした「ため池」がきわだっており、見る者の目を引いた。

授業が始まると、「この青色は何だろう」

と第一発問が発せられ、そして、『なぜ知多半島には、こんなにため池がたくさんあるのだろうか』という課題追究に展開していった。「川が少ないのではないか」という子どもの発言に対しては、知多半島の河川図が張り出され、さらに年間降水量の図が追加されて、資料図を読み解きながらの問題解決学習が進められていった。

視聴覚教材の効果に刮目する

「知多半島は降水量が少なく、川も短い。そのために、人々はため池を作って米作りをしていた」

こんな結論が出されたとき、先生は、NHK名古屋放送局制作の学校放送ラジオ番組『マイクの旅』の録音を再生して聞かせられた。

食事に使う飲料水は、毎朝共同井戸からバケツで運んでいること。雨水を天水桶にため

社会科担当教員に広がり、やがて学校全体の実践にまで広がった。そしてCATV（ケーブルテレビ）校内TV放送局の開局となり、教師自らがテレビ番組を制作する活動が始まった。

先生方と協力して意欲的に活動に取り組んだ結果、昭和四四年度視聴覚教育賞で『映像を通しての理論的思考力の形成をめざして』が学校視聴覚教育奨励賞を受賞したのを皮切りに、昭和四五年度放送教育賞で『城北中学校教育の近代化に果たした城北放送局の役割』が文部大臣賞を、昭和四七年度毎日新聞視聴覚教育賞で『城北教育と視聴覚教育』が最優秀賞を受賞することができたのである。

視聴覚ライブラリーへ

昭和四八年度、岡崎市公立視聴覚ライブラ



リーの設立と同時に、指導員として勤務することになった。私は、従来からの映画フィルム・ライブラリーとしての機能だけでは、授業に視聴覚教材を活用していただき『教育の現代化』を支援するという、ライブラリーの機能を十分に発揮できないと考えた。

視聴覚教材の自作では、「ビデオ教材」が経費の上から最も安上がりであることを城北中学校の実践で学んでいた。そこで、新しく社会科学習の内容に加わった「地域学習」のための教材として、『衛生センターの働き』というビデオ教材の自作に取り組むことにした。

八ミリ映画やスライド教材の自作経験を持つ教員、社会科教師として指導力の優れた教員でチームを編成して、六月から十月までの四か月を費やして完成させた。ゴミ収集車の運行時刻に合わせての深夜の撮影や、真夏の暑い最中での焼却炉の撮影など、大変な仕事となったが、出上がったビデオ作品の試写会は、そんなものを吹き飛ばしてくる喜びを与えてくれた。

そのときから約三〇年の歳月が経過した。今も岡崎市視聴覚ライブラリーは、その事業の中枢に「ビデオ教材の自作」を据えて、シナリオ作りは各教科部会の力を借り、制作技術を視聴覚部会が担当するというシ

ステムで活動している。

ライブラリー制作のビデオ教材は総数二五〇巻を超し、全国自作ビデオ教材コンクールで、文部（科学）大臣賞を受賞した作品も二巻になった。

出会いの感動を教え伝える

視聴覚教材を活用した授業に感動した一人の教師がいた。その教師が自分の実践にその感動を活かす努力をして、仲間を増やしていった。その実践を教育研究論文にまとめて社会的な評価を得た。

しかし、ここで終わっているのは、開眼させてくださった先輩教師に申し訳ないことである。後輩に、その技を教授して初めて、教えられたことへのお返しになるのではなからうか。

師との出会いを大切にし、そこから学ぶ。学び取ったことを、後輩に伝えていく。後輩はさらにそれを超えるよう努力し、新しい道標を打ち立てる…。

そもそも師とは、師を超える弟子が出現することを最も喜びとするものである。師とは身近にあつてこそ、まるごと学べるものである。

求めよ！。道は開けるのだ。

芦田恵之介も言っている。『求め、求めてよし得ずとも、求めざるには勝れり』と。